

## 白蓮洞説明

千里洞の洞口より、東北東の方向にのびている谷を100m程  
分け入ると、そこは行き止りとなり、谷は終わっている。こ  
に橋洞(耳の形をしてい)がある。この橋洞の東斜面を10m程登  
りきると、目の前にドリーネが見える、直径10m程の円形で  
ある。その底には、白蓮洞の第Ⅱ洞口がある。

ドリーネの北側に、第Ⅰ洞口が、ぽっかり空をにうんであり  
てゐる。洞口は、北から流れ込む沢に侵食されて白い花模様  
となっている。これが白蓮洞の名の由  
来である。ドリーネと第Ⅰ洞口との間  
にある岩に、ジッフルで梯子をスクス  
して、洞窟調査の第Ⅰ歩が始まる。  
(洞内の構造は付録の断面図及び平面)  
を参照



この洞窟においても、ほとんど垂直あ  
るいは、ハングぎみは所々梯子を使用)

と、だらだらとゆるり下り坂になってゐる所とがくりかえさ  
れてゐるわけであるが、特に、肉体労働の点から、いわゆる  
「しんどい」ところは (i) 洞口より、第Ⅰテラスをとおり、第  
Ⅰホールまで45mのはじの行程で、オーバーハングしてゐ  
る。(ii) ゆるゆる美かの滝、この「美か」の名称は、滝にうたれ  
ビショビショになるところからきた駄洒落である。この滝には50  
mの梯子をかけたが、上の8mまでは梯子が完全に壁につ  
ており、それより下は、壁より10cm程はなれて、梯子を昇り  
降りする分には、きわめて簡単のところであるが、どしゃぶ  
りの雨のように降ってくる水はこれまでの洞窟の中でも、もっ  
とも冷たく、約3℃である。特に上の8mは、梯子が壁に緊着  
するため、降ってくる水に加えて、岩肌を流れる水量の滝水に  
より、單手をしてゐる手は無感覚となり、梯子をつかんでゐ  
ることすら困難であった。このため50mをひとりきりに昇るこ  
とが所要である。

洞口より洞内を見おろすと、これはまるで井戸である。25m  
下に小さなテラスが認められる。これが、第Ⅰテラスである  
そのテラスまでに15mのところがすこし狭くなつてゐるこ  
を除けば、奥に行く程広がつてゐる。

第Ⅰテラス(-25m地点)(1畳分の広さ) 南方向、仰角45°に第Ⅱ  
洞口、第Ⅰホールの天井に、小さな開口部が認められる。こ  
こからは空ゆく雲や、緑の木々が見える。

第Ⅰホール(-45m~-70m) 正確にいつて、これをホールとい  
うべきかどうか疑問である。北西にのびる二枚の断層面が、  
人型になつて、天井と壁を構成してゐる。ゆるゆる岩のわれ  
目である。落石と流水のほとんどは、ここで静止する。  
小さな支洞があるが、これは明らかに落盤と落石によつてで  
きた「すきま」である。この支洞内で生物採集をした。

次に24m梯子でありると、それから美女の滝までは、だらだら下っていかねばならない。途中2ヶ所梯子をかけた。

上の方の梯子は、大きな岩をのりこすためにフックスされたものであるが、下の方の梯子は、流木と落石でできた、くすれそうな滝を安全に通過するためである。この狭い過程(-80m<sup>2</sup>-100m<sup>2</sup>)を約限ルートという。流水も多く、流木と落石の危険な滝(ほとんどが2m~3mの高さ)が4ヶ所ある。

美女の滝をおりたところに第Ⅱテラスがある。5m四方のテラスではあるが、どしゃぶりの雨にさらされて、それを避けるとはかたえなない。このテラスの下に15mの梯子であり、そこから第Ⅱホールまでは、もはや広いところなど全くなく、4ヶ所の梯子の使用が必要である。(そのうち1ヶ所は、苦勞のすゑ使用せずに通過した) 特に狭いところは、1ヶ所だけである。この-200m~-300mを狂人ルートという。

この狂人ルートまでくると流木の大きさにも限度がある。大きくても直径15cm以下である。プールは、11くつかあったが流水、降水は、ほとんどない。静かである。

第Ⅱホール(-310mの地点) いたるところ落盤である。大きな落盤にもなると高さ5mにもなる。ここには泥岩があり、ウミユリのすばらしい化石もここにある。

第Ⅱホールより ニラマレの間まで35mの過程は、4mニークライミングで通過する。ニラマレの間は、ゆがみ、長さ8mぐらいである。小石が、床一面にちらばっている。進んでゆくと、目の前がスッに分れている。(アルペン写真と参照) ここにも流木がある。こんなところまで流木が来ているとは全く驚異である。ニラマレの間の片方の目玉から下へ降りてゆくと、すぐに第Ⅲホールである。

第Ⅲホール(-355m地点)は、流木、落石はなく、白く、きれいである。何か霧のようなものが、たちこめている。直径10mでまわり、それから先は、落石、落盤が多く、45°の伏角が続いているのだが、それゆゑ、危険であるうゑ、人員も限度であった。

日光ライトで下を照らして、みようとしたが、あの霧のようなものがじゃましてよく見えなない。石を落してもみたが、すぐに落盤の間に入ってしまふ。しかし思ふに、第Ⅲホールは床面と壁とが完全に連続して一枚岩であるから、水は決して吸い込まない。たとすれば、ニラマレの間まで流木を運んできた、多量の水は、この第Ⅲホールよりも、さらに、さらに奥深くのみこまれていくにちがいない。

また、11つの日が第Ⅲホール以下に挑戦しなければならぬ。この白蓮洞は、長さといい、深さといい千屈洞につぎ、またそれ以上の困難さを持っている。

ゆめゆめは、もっと体力をつけておかねばならない。